

8月



(8月30日)「コリントの信徒への手紙一 5:4~8」

だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種が入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。

(コリントの信徒への手紙一 5章8節)

- ・イエス様はルカ福音書 13章 20~21 節で、「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」とたとえられました。このときは肯定的に、パン種を用いておられました。
- ・パウロは、古いパン種を取り除きなさいと命じます。古いパン種とはコリントの人たちが教会に連なる前に持っていた、生活習慣や価値基準なのかもしれません。過越祭のときにすべてのパン種(酵母)が取り除かれたように、あなたたちも新しくなりなさいと言うのです。
- ・わたしたちも洗礼を受けるときに、古い自分を捨て、新しく生きることを目指します。古いものにこだわってはいけません。教会も同じです。古いものに固執するときに、全体が腐敗してしまうこともあるかもしれないのです。

(8月31日)「コリントの信徒への手紙一 5:9~13」

外部の人々を裁くことは、わたしの務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか。

(コリントの信徒への手紙一 5章12節)

- ・パウロはコリントの信徒に向けて、聖書には載せられていない手紙も送っていたようです。そしてその中には、誤解を生む表現もあったようです。それは、「みだらな者と交際してはならない」というものです。
- ・その手紙を受け取って、コリントの人たちは教会の外にいる「みだらな者」と関わらないようにしました。ファリサイ派の人たちが、「汚れた人」と決して関わらなかったのと同じことのように思えます。
- ・教会は外の人たちを裁くべきではない、それは神さまがなさることだというのが、パウロの主張です。イエス様がなさったように、わたしたちも教会の外にいる人たちと共に歩んでいきましょう。

(8月1日)「ローマの信徒への手紙 13:11~14」

夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。

(ローマの信徒への手紙 13章12節)

- ・「救いは近づいている」とパウロは書きます。十字架につけられお墓に葬られたイエス様は、復活した後に天に昇られます。そのときにイエス様は、またご自分が来られる(再臨)ということをお約束されました。
- ・パウロが活動していた初期は、明日にでもイエス様は来られると思われていました。しかし次第に時が過ぎ、なかなかイエス様が来られない状況を見て、人々は「欲望」に目を向けるようになってしまったのです。
- ・それから2000年という時が過ぎました。もしかすると明日、イエス様が来られるかもしれません。その緊張感と期待をもって、日々を歩むことができればと思います。光の武具を身に付けて。

(8月 2日)「ローマの信徒への手紙 14 : 1~4」

食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。

(ローマの信徒への手紙 14 章 3 節)

- ・「信仰の強い人」と「信仰の弱い人」という表現が出てくると、自分は「弱い」方だ、だからこの箇所では「受け入れられる」べき方だと思ってしまうかもしれません。果たしてそうなのでしょうか。
- ・ここでパウロのいう信仰の弱い人とは、信念や確信に欠ける人ということではありません。そうではなく、自分の思いに縛られてしまってそこから自由になれない、神さまにすべてを委ねることのできない人という意味です。
- ・つまり「我が強い人」＝「信仰の弱い人」ということでしょうか。なかなか自分というものを捨てられずに、自分の殻に閉じこもってしまっている人、いないでしょうか。教会はそういう人も、受け入れていくのです。

(8月 3日)「ローマの信徒への手紙 14 : 5~12」

それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。

(ローマの信徒への手紙 14 章 10 節)

- ・「個人の信仰」と「共同体の信仰」という言葉があるとすれば、キリスト教の信仰は「共同体の信仰」を強調しているように思います。この 14 章には、「きょうだい」に対してどう接するべきかが書かれています。
- ・日本聖公会が 2006 年に発行した聖歌集でも、それまでの古今聖歌集に多く見られた「個人的な信仰の歌」が減り、「私たちの信仰」が多く歌われるようになりました。「共に」という言葉が強調されるようになったのです。
- ・「きょうだいを裁くな」、「きょうだいを軽んじるな」とパウロは書きます。わたしたちは皆、神さまの前に立つことになります。そのときに隣の人と手を取り合いながら、共に立つことができればいいですね。

(8月 28日)「コリントの信徒への手紙一 4 : 14~21」

あなたがたが望むのはどちらですか。わたしがあなたがたのところへ鞭を持って行くことですか、それとも、愛と柔和な心で行くことですか。

(コリントの信徒への手紙一 4 章 21 節)

- ・パウロはここで、このような厳しい勧告をするのはあなたがたが「愛する自分の子ども」なのだからだと書きます。パウロは決してコリントの人たちをやみくもに非難しているのではありませんでした。
- ・彼は「養育係」として、彼らをキリストに導く使命をもっていました。ユダヤには「養育係」という人がいて、子どもをしかるべき年齢に達するまで導いていました。多くは奴隷がその役割を任されていました。
- ・パウロは自らを養育係と考え、「わたしに倣う者になりなさい」と呼びかけます。パウロを通して、キリストに倣うためです。わたしたちには、聖霊が養育係として与えられています。わたしたちも聖霊を通して、キリストに倣う者となりましょう。

(8月 29日)「コリントの信徒への手紙一 5 : 1~3」

現に聞くところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしているとのことです。

(コリントの信徒への手紙一 5 章 1 節)

- ・ユダヤ人は、律法を大事にして守ってきました。レビ記 18 章 8 節には、「父の妻を犯してはならない。父を辱めることだからである」という戒めがあります。そのようなことを、「みだらな行い」だと定めていました。
- ・おそらく父の死後にそのようなことになったということでしょうが、それは近親相姦にあたり、律法だけではなくローマの法律でも禁止されていたようです。しかしそのような人を排除することもなく、彼らは高ぶっていたのです。
- ・4 章には「裁くな」と書いてあったので、「除外すべきではなかったのですか」と言われても困るところですが、パウロは罪の自覚があまりにもないところにいら立ちを覚えたようです。「律法に倣う必要はない」という言葉を、誤って捉えてしまったのです。

(8月 26日)「コリントの信徒への手紙一 4:1~5」

自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。

(コリントの信徒への手紙一 4章 4節)

- ・パウロは、コリントの人たちと自分自身、つまり「わたしたち」は、神さまの秘められた計画をゆだねられた管理者だと書きます。支配者ではなく、管理者です。神さまは天地創造のときに、人間にすべてを「管理」させました。
- ・管理とは、すべてを自分の思うように用いて良いということではありません。そうではなく神さまの目に良しとされるように、すべてのものを整えていくことです。わたしたちはそのことを勘違いし、自然破壊を繰り返してきたのです。
- ・コリントの人たちにもパウロは、管理者になるように求めます。それは自分たちが正しい者として立ち振る舞うのではなく、裁きはすべて神さまに任せることも意味します。わたしたちも教会の「管理」を神さまに任されているのだということを、覚えておきましょう。

(8月 27日)「コリントの信徒への手紙一 4:6~13」

考えてみると、神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見せ物となったからです。

(コリントの信徒への手紙一 4章 9節)

- ・コリントの人たちの大きな問題は、その「高慢さ」にあったようです。コリントの教会はパウロがいない間に、大きく成長したようです。ただしこの成長とは、人が多く集まるようになったという意味です。
- ・ただ彼らはそれを、自分たちの「功績」や「力」だと勘違いしてしまいました。また雄弁に語るアポロと、話が長くつまらない(と言われていた)パウロとを比較して、パウロに対する中傷もなされていたようです。
- ・しかしパウロは使徒の苦難を列挙し、キリスト者とはどういう人であるかを伝えます。キリストのために賢い者ではなく、愚か者になるとはどういうことか。一緒に考えていきたいと思えます。

(8月 4日)「ローマの信徒への手紙 14:13~23」

従って、もう互いに裁き合わないようにしましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい。

(ローマの信徒への手紙 14章 13節)

- ・ユダヤ教やイスラム教には、厳しい食物規定があります。また現代のキリスト教においても、教派によってはお酒やたばこに対して、厳しく指導するところがあります。聖公会では特に厳しい決まりはありません。
- ・前に勤務していた教会で、エキュメニカルバーベキューというものを企画しました。昨年奈良でもおこないましたが、そのときにアルコール OK の人も NG の人も、お互いを尊重しましょうという挨拶をしました。
- ・自分と違う考え方の人を非難するのは簡単です。しかしそうではなく、お互いのことを受け入れる。パウロが書いたときはユダヤ教とキリスト教との関係でした。そして今、わたしたちの教会の中でも、大切にしていきたいよう。

(8月 5日)「ローマの信徒への手紙 15:1~6」

心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。

(ローマの信徒への手紙 15章 6節)

- ・昨日の箇所ではパウロが指摘した食事規定に限らず、教会の中にも様々な「違い」が存在してきました。今の教会には宗教的な戒律による「違い」は少ないですが、信仰的な思いについての「違い」は多く存在します。
- ・その「違い」はときに、教会内の交わりを壊してしまいます。他人の意見に耳を貸さずに自分の思いばかりを強調するとき、そこには亀裂が生じるのです。しかしパウロは、イエス様がわたしたちのためにどうなさったかを思い起こすように促します。
- ・イエス様はわたしたち一人一人のために十字架につけられ、わたしたちに命を与えられました。他人のために命を投げ出されたのです。わたしたちも自分のためではなく、隣人のために信仰生活をおこないたいものです。

(8月 6日)「ローマの信徒への手紙 15 : 7~13」

希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。

(ローマの信徒への手紙 15 章 13 節)

- ・イエス様の十字架による救いは、ユダヤ人も異邦人もすべて救うためのものでした。旧約聖書から続く救いの約束は、全人類に向けられたものです。その中には、わたしたちも含まれます。
- ・神さまはそのように、清い者もそうでない者もみな受け入れられるのです。だからわたしたちもまた、お互いに相手を受け入れていきましょう。「ユダヤ人と異邦人」というと何か遠く離れた問題のように思えます。
- ・しかしわたしたちの間で、誰がユダヤ人化しているか、誰が異邦人のように扱われているか、そういったことも意識しながら歩むことも必要なかもしれません。すべての人が受け入れられる教会を目指していきましょう。

(8月 7日)「ローマの信徒への手紙 15 : 14~21」

そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。

(ローマの信徒への手紙 15 章 17 節)

- ・このローマの信徒への手紙は、パウロがローマを訪問する前に書かれたものです。コリントやエフェソ、ガラテヤなどに対する手紙は、実際にパウロが訪問してできた共同体に対しての勧告や指導でした。
- ・ローマにもキリスト者はいましたが、パウロがローマで直接導いたわけではありません。パウロはその人たちに福音を伝えるために、この手紙を書きました。会ったことのない人への手紙です。もしかしたら傷つけることも書いてしまったかもしれません。
- ・それでもパウロは、自分が神さまから委ねられた使命を信じ、語り続けます。わたしたちも「まだ見ぬ人たちに」、神さまの愛を伝えていくことが大切なのです。イエス様を知らない人にこそ、福音を伝えていきましょう。

(8月 24日)「コリントの信徒への手紙一 3 : 10~17」

イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。

(コリントの信徒への手紙一 3 章 11 節)

- ・パウロはコリントの人たちに、わたしが神さまの恵みによって教会の土台を据えたと告げます。さらにその土台は、イエス・キリストという土台を無視して建てることもできないと書きます。
- ・建物を建てる時には、基礎工事をかなりしっかりしないと丈夫な建物はできません。また土台とは全く違うサイズの建物を建てようとしても、うまくいかないでしょう。土台を大切にすることが必要なのです。
- ・わたしたちの身体は、神さまの神殿だと言われます。しかし自分の力だけでどれだけ着飾ろうとしても、その土台が無視されてしまえば、それは堅固な建物とはならないのです。神さまの霊を感じ、日々歩みたいものです。

(8月 25日)「コリントの信徒への手紙一 3 : 18~23」

だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだけれが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。

(コリントの信徒への手紙一 3 章 18 節)

- ・「あなたは愚かな者になりなさい」と言われると、わたしたちはどう感じるでしょうか。「愚かな者」と日本語で言うととてもマイナスなイメージがありますが、「自分の知恵を持たない者」と解することもできます。
- ・自分の知恵に頼らずに、神さまの知恵にのみすべてを委ねなさい。それがパウロの言いたいことであり、「だれも人間を誇ってはなりません」という言葉にもつながっていくことです。
- ・「わたしは自分の力では何もできない」、それは無力なのではなく、そのことにおいて本当に神さまを信頼し、委ねることができる素晴らしいことなのです。自分を誇ってはいないでしょうか、いつも心に留めておきましょう。

(8月 22日)「コリントの信徒への手紙一 2:10~16」

わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。

(コリントの信徒への手紙一 2章 12節)

・牧師になって10数年、毎週のように説教を語り続けています。たまに「準備とか大変じゃないですか？」と聞かれることがありますが、「いえ、説教を語るのは喜びですから」と答えています。

・それは別に、いいカッコしいではありません。説教を語る中で、自分でも驚くようなことが起こるときがあります。これは霊(聖霊)が働いたとしか思えないというようなことが、しばしば起こるのです。

・神さまの霊が直接聞く人に働き、心の目を開いてくださるのでしょう。わたしたちは知恵の言葉を、自分の力で理解することはできないかもしれません。しかし神さまは霊を通して、わたしたちに語られるのです。

(8月 23日)「コリントの信徒への手紙一 3:1~9」

わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。

(コリントの信徒への手紙一 3章 6節)

・パウロはコリントの人たちに、「あなたたちは乳飲み子だ」、「あなたたちは肉の人だ」と非難します。コリントの人たちは自分たちは成熟しており、周りの人は肉の人だと見下していました。

・しかし彼らの間には妬みや争いが絶えず、その状況を見たパウロは彼らこそ未成熟なのだと言うのです。コリントの人たちは1章10節~でも指摘されたように、「誰々派」という考え方を持っていました。

・この考えは、わたしたちの間にもみられるのかもしれませんが。「派閥」だけでなく、「〇〇(牧師の名前)教」と呼ばれることもしばしばあります。「成長させてくれるのは神」、その言葉を心に留めていきましょう。

(8月 8日)「ローマの信徒への手紙 15:22~29」

こういうわけで、あなたがたのところに何度も行こうと思いつながら、妨げられてきました。

(ローマの信徒への手紙 15章 22節)

・パウロのローマ行きは、何度も妨げられていたようです。ローマは当時の世界の中心地でした。そのためパウロのような「新しい教え」を伝えているようなややこしい人物は、来させないようにしていたのかもしれませんが。

・パウロは61年から2年間、ローマで軟禁状態にあったことが使徒言行録には書かれています。それがパウロにとって、念願のローマ行きとなりました。監禁ではなかったもので、比較的自由に人に会えたようです。

・ただここに書かれているイスパニア(スペイン)に行ったかどうかはわかりません。それよりもエルサレム教会に献金を届けに行くことを優先したのかもしれませんが。その行動は今となってはわかりませんが、パウロは神さまのみ心に従って歩いていったのです。

(8月 9日)「ローマの信徒への手紙 15:30~33」

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、

(ローマの信徒への手紙 15章 30節)

・誰かのために祈ること。キリスト教に限らず、わたしたちは誰かのことを思い、お祈りやお願いをすることがあります。聖公会の教会では「代祷」という時間が設けられ、様々な事柄を祈ります。

・教会のため、関連施設のため、信徒さんの記念日(誕生日や逝去記念など)のため、また世界で起こっている争いの終結や自然災害によって苦しんでいる人のためなど、それに個人的に心にあるお祈りと合わせて、わたしたちは祈り続けます。

・パウロはそして、「わたしのために神に熱心に祈ってください」と願います。具体的に祈りの内容を示し、祈りを求めるのです。誰かのために祈る、そしていつも誰かに祈られていることを覚える。そのような祈りあう教会でありたいものです。

(8月10日)「ローマの信徒への手紙 16:1~6」

キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、プリスカとアキラによろしく。
(ローマの信徒への手紙 16章3節)

・ローマの信徒に書かれた実際の手紙は15章で終わっており、この16章は後代の付加であるとか、他の手紙につけられていたものが入られたとか、様々な議論がなされてきました。しかし1~3節については、パウロが実際に書いたものであると考えられています。

・パウロはよく、男尊女卑だとか女性蔑視をしていると言われることがあります。確かにそのように感じる箇所もありますが、ここではフェベという女性のために配慮を願うパウロの言葉があります。

・フェベはケンクレアイというエーゲ海に面した港町にいました。そこを往来するキリスト者に対し、もてなしていたようです。ここに書かれている「奉仕者」という言葉の原語は、「執事」と同じものです。女性の働きも、パウロは良いものとして受け入れていたのです。

(8月11日)「ローマの信徒への手紙 16:7~16」

あなたがたも、聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい。キリストのすべての教会があなたがたによろしくとっています。

(ローマの信徒への手紙 16章16節)

・パウロはローマの信徒への手紙の最後に、たくさんの人たちの名前を書きます。まだローマに行ったことのないパウロが、これだけのメンバーの名前を知っているということはどういうことなのでしょう。

・もともと他の場所でパウロの教えを聞いていたのか、あるいはエフェソなど他の場所で活動している人たちの名前なのか。それはわかりませんが、女性の名前が多く登場することにも注目したいと思います。

・初代教会のときから、女性は教会の中で重要な役割を担っていたようです。現在の教会はどうでしょうか。「聖なる口づけ」は、わたしたちの文化の中では違和感があります。しかし同じくらい親密な気持ちで、働きに敬意を表しながら挨拶を交わしていきましょう。

(8月20日)「コリントの信徒への手紙一 2:1~5」

なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。

(コリントの信徒への手紙一 2章2節)

・聖書に書かれているパウロの手紙を読むと、彼はいつもエネルギッシュで力に溢れ、何も恐れずに突っ走っていく、そのようなイメージを持ちます。しかし実際は、必ずしもそうではなかったようです。

・パウロが前回コリントに行ったときには、彼は衰弱していて恐れに取りつかれていたそうです。でもだからこそ、「パウロの言葉」ではなく「神さまの言葉」に人々は耳を傾けることができたのです。

・「わたしは弱さを誇る」と、パウロは別の箇所で語ります。十字架につけられたイエス様も、無力でした。しかしその中に、わたしたちを生かす「いのち」があるのです。弱さの中にこそ、大切なものが隠されているのです。

(8月21日)「コリントの信徒への手紙一 2:6~9」

わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。

(コリントの信徒への手紙一 2章7節)

・パウロが語る「知恵」とは、神さまの秘められた計画のことを指します。神さまは、律法を守ることができないわたしたち人間に対し、救いの道を開かれました。それがイエス様の十字架でした。

・しかしその「知恵」は、人々には理解できないことでした。人々は目に見える恵みを欲し、目には見えない計画に気づけなかったのです。ヨハネ福音書1章の「言は、自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった」という箇所が思い起こされます。

・わたしたちは「知恵」と聞くと、「自分の力で得る知識」を思い浮かべるかもしれませんが。しかし「神の知恵」はわたしたちに一方的に示されます。理解できなくても、受け入れることが大切なのです。

(8月 18日)「コリントの信徒への手紙一 1:18~25」

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。

(コリントの信徒への手紙一 1章 18節)

・十字架刑はローマ帝国が反乱を防ぐための残虐な死刑方法で、見せしめのためにおこなわれていました。十字架の上に長期間放置されることで、人々は恐怖を覚え、権力に逆らうことをやめるのです。

・よほどの重罪人しかつけられない十字架に、イエス様は架けられました。普通に考えると、そのような人とは関りを持ちたくないと思います。しかし神さまはそのような手段を用いて、わたしたちを救いに導くのです。

・わたしたちにとって、イエス様の十字架は大切なシンボルです。しかしその十字架によって、イエス様が血を流されたことも、忘れずにいたいと思います。神さまの愛が、キリストの十字架には込められているのです。

(8月 19日)「コリントの信徒への手紙一 1:26~31」

それは、だれ一人、神の前で誇る事が無いようにするためです。

(コリントの信徒への手紙一 1章 29節)

・パウロはコリントの人たちに、召されたときのことを思い出すようにと語ります。あなたがたは知恵があったわけでも、能力があったわけでも、家柄がよかったわけでもないだろうと言うのです。

・しかしそれにもかかわらず、神さまはあなたがたを選んだ、いや、そんなあなたがただからこそ、神さまか選んだのだと伝えるのです。漁師や徴税人を弟子とした、イエス様を思い起こします。

・わたしたちもまた神さまの招きによって集められ、教会に連なる者とされました。それは自分の努力や能力ではなく、神さまからの一方的な呼びかけに応じたに過ぎないのです。わたしたちが自分を誇るとき、そこには分裂が待っているのです。

(8月 12日)「ローマの信徒への手紙 16:17~20」

あなたがたの従順は皆に知られています。だから、わたしはあなたがたのことを喜んでいますが。なおその上、善にさとく、悪には疎くあることを望みません。
ローマの信徒への手紙 16章 19節)

・最後の挨拶の途中に、突然「警告文」が入ってきます。この部分を後から挿入されたものだと考える人たちもいますが、パウロが手紙の最後に一番気を付けて欲しいことを書き記したともいえるでしょう。

・「学んだ教えに反して、不和やつまずきをもたらす人々」とは、「偽教師」とも呼ばれます。彼らは教会に分裂を起こさせるように、教会の内部に入り込みます。現在でも「カルト教団」と呼ばれる人たちの中には、教会の信徒を装って活動している人もいます。

・パウロの他の手紙にもあるように。このような「偽教師」による分裂は各地で起こっていたようです。わたしたちの教会も、「うまい言葉」や「へつらいの言葉」には注意していきましょう。

(8月 13日)「ローマの信徒への手紙 16:21~23」

この手紙を筆記したわたしテルティオが、キリストに結ばれている者として、あなたがたに挨拶いたします。

(ローマの信徒への手紙 16章 22節)

・ここでまたパウロは、挨拶を再開していきます。パウロとともに行動していたテモテたちの名前も出てきます。テモテは協力者と呼ばれ、新約聖書の中には彼に宛てて書かれた手紙が2つ残されています。

・ルキオやヤソン、ソシパトロがどのような人物なのかは、記録に残っていません。使徒言行録に出てくる同じ名前の人と同一人物かどうかは定かではありません。ただパウロは多くの協力者と共に、行動していたのだということです。

・一匹狼のように見えるパウロは、そうではなかったようです。しかも視力もかなり衰えていました。そこで彼は、口述筆記者を使って手紙を書いていたようです。そのテルティオという人物も、自分の挨拶を書き加えています。

(8月 14日)「ローマの信徒への手紙 16 : 25~27」

この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

(ローマの信徒への手紙 16 章 27 節)

- ・パウロの福音理解を最も的確にあらわしているとされる「ローマの信徒への手紙」の最後に、パウロは「神への賛美」を書き記します。イエス様によって明らかにされた救いの計画に対して、パウロは感謝を伝えます。
- ・パウロは決して自分の力ですべてを理解し、宣教しているではありませんでした。そのことが分かっているからこそ、彼は手紙の最後に神さまに対する賛美の言葉を綴ったのでしょう。
- ・わたしたちも何かをおこなうとき、神さまへの感謝と賛美を忘れないようにしたいものです。神さまがわたしたちのためにイエス様を遣わされたこと。そして救いの道を開かれたこと。そのことを信じて、今日も神さまに感謝し、神さまを賛美しましょう。

(8月 15日)「コリントの信徒への手紙一 1 : 1~3」

わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

(コリントの信徒への手紙一 1 章 3 節)

- ・今日から「コリントの信徒への手紙」を読んでいきます。コリントはローマとは違い、パウロが実際に伝道して教会共同体をつくった場所です。そのため手紙の中には、教会が抱えていた具体的な問題も書かれています。
- ・手紙の宛先にあるソステネという人物はコリントに住むユダヤ人たちの指導者の一人だったようですが、使徒言行録 18 章 13~17 節に出てくる人物と同じ人かどうかは分からないそうです。
- ・2000 年前の教会に起こっていた問題は、もしかしたらわたしたちの教会の中にも起こりうることもかもしれません。この手紙を、神さまがパウロを通して語られたわたしたちに対するメッセージとして読んでいきましょう。

(8月 16日)「コリントの信徒への手紙一 1 : 4~9」

わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。

(コリントの信徒への手紙一 1 章 4 節)

- ・パウロはまず、コリントの人たちが神さまの恵みを受けたことについて感謝していると書きます。コリントは、エーゲ海とアドリア海を隔てた場所にあるギリシアの都市でした。そのため、多くの文化が混ざり合っていました。
- ・劇場や市場だけでなく、神秘宗教の神殿もあったと言われるコリントでは、様々な神々が信仰の対象となっていました。その中においてあなたがたは、キリストに結ばれたとパウロは書きます。
- ・ここまですら読むと、パウロはコリントの人たちを手放しで褒めているようにも見えます。しかし明日以降、パウロの語調は勧告へと変わっていきます。どのようなことをパウロは語っていくのか、わたしたちも心して聞いていきたいと思います。

(8月 17日)「コリントの信徒への手紙一 1 : 10~17」

さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。

(コリントの信徒への手紙一 1 章 10 節)

- ・パウロはコリントの人々に勧告をします。その内容は、一致の勧めです。2000 年前の初代教会から分裂をしていたところをみると、わたしたちの教会がバラバラ (?) なのも仕方ないと諦められそうです。
- ・人々は、「パウロ派」、「アポロ派」、「ケファ (ペトロ) 派」のように、分かれていたようです。その人から洗礼を受けた、その人の教えが合っている、その人とはウマが合う、様々な理由がありそうです。
- ・しかしわたしたちは、「キリスト派」であるべきなのです。キリストの十字架によって生かされていることを意識しなければなりません。そうすると、「わたしはこの牧師さんがいいわあ」という会話もなくなっていくのではないのでしょうか。